

トマス・アキナスの倫理思想

中世研究 第11号

上智大学中世思想研究所編



創文社

上智大学中世思想研究所紀要

中世研究 第11号

〔トマス・アキナスの倫理思想〕

一九九九年二月二〇日 第一刷印刷
一九九九年二月二五日 第一刷発行

編者 上智大学中世思想研究所

発行者 久保井浩俊

印刷者 安達精治

発行所 株式会社 創文社

〒101-8345

東京都千代田区麹町二一六―七

電話〇三―三三六三―七〇一

振替〇〇―二〇〇―九二四七二

©学校法人上智学院一九九九年 晩印刷・鈴木製本

ISBN 4-423-30101-6 Printed in Japan

序 言

哲学は現実全体を理解することを課題とするものであるため、その中心的主題は、全体としての存在者をその根源に関して問うというところに置かれる。このような理論的思考は、それが存在理解の枠組みにおいて人間存在の意味を解明し、その本質に即した実践の根本構造を解き明かすことができるということによって確証される。人間的、また倫理的行為についてのこのような理論は、まず人間の事実的あり方に関する経験的考察から区別される。それというのも、経験的現象から出発してそこからの帰納的推論によって倫理的規範性が獲得されるということはありえないからである。また人間的・倫理的行為についての理論は、人間の本質とその能力に関する存在論的考察からも区別される。なぜならそうした存在論的考察は、本質および現実性としての存在の次元において展開されるのであり、そこでは人間の行為の意味についての問いは十分に考察されることがないからである。人間の実践とは、意味を実現することをその目的とするが、意味と目的は、経験においても事実としても与えられるものではないため、倫理についての学は、ある種の投企としての性格をもち、トマス・アクィナスが自然法について語っているように、本質的に「理性の業^{わざ}」なのである。確かに理性は自発的な進展の内にその目的を自ずと見出すものではあるが、人間的行為についての倫理的理論の構築は、創造的理性による構成である以上、自らの正当性をその理論において構成された意味にもとづいて示すべきであり、それによって人間的行為をその自由な目的設定に関して導くものとなる。

序 言
このような意味と目的の投企、そして目的の光の下で顕わになる個別的問題の投企もまた、なるほどそれ自体

人間の行為として、思惟する者の個人的目的理解によっても規定されているのであり、トマスがよく引用するアリストテレスの言葉に従えば、「その人がどのような点に従って、彼に目的が見えてくる」のである。トマスの倫理学は、その客観性、包括性、自然と自由の調和という点において、また義務・法・罪よりも徳・恵み・愛を強調する点において、紛れもなくトマス自身の性格を反映している。しかし倫理学の理論は普遍的な妥当性を主張し、明白な根拠づけを必要とするものであり、しかもそれは人間の行為についての理論である限り、そうした根拠づけは、人間の本質、ないし人間存在の意味の構造にもとづいてなされるほかはない。そのためにトマスは、『神学大全』第二部で展開しているような倫理学に先立って、その第一部で、人間存在とその能力の構造を存在論的に分析しているのである。そのような分析から、人間に固有の認識と意志の働きの構造が明らかになるが、人間的・精神的活動は、志向的で、人間本性を超出する構造を有するところから、そこでは人間存在を包括し、規範としてそれに先立つような目的の次元が要求される。トマスにおいては、倫理的行為にとって本質的なこのような規範性の究極的な根拠づけは、存在論的に解明された神学的次元の内に求められるのであり、そのために哲学的人間論は神学の内で、すなわち『神学大全』第一部において、神論および創造論の枠組みの内で展開されるのである。その際に、善そのもの、あらゆる存在者の究極目的、および無制約的で理性的な規範性といった根本規定は、その内実に関してはただ神学的にのみ満たされるものであるにせよ、人間の精神性の内で超越論的に先取りされているということが明らかにになる。それというのも、人間の精神は、ただ存在、真理、善そのものの分有からのみ自ら自身を理解することができるからである。

このような神学的・人間論的な理論の規定にもとづいて、『神学大全』第二部の一でトマスは、人間の行為の意味をその本質的な目的から把握している。なぜなら人間の自由な倫理的行為は自らに対して具体的目的を設定

しなければならぬものである以上、その行為は目的性そのものという、人間精神の根本的追求によって開かれる地平の内になされるからである。さて、人間存在の内在的な目的は、その本性にふさわしい完成ないし至福の内存するのであり、この至福はさらに、人間精神の無制約的な開きにもとづいて、神の直視として規定される。そしてこの神の直視は、情動を含めた人間存在全体が自由に善へと向かうことによって、とりわけ諸々の徳を通じてのみ達成されるものである。それゆえ人間の行為は、まずは人間に自然本性的に具わる傾向性によってその方向づけがなされるが、その規範性と倫理的性格は、無制約的な善——道徳法則において神の本質と意志の表現として明確に把握される善そのもの——にもとづいて初めて獲得される。善における人間の自己完成と神への超越は、人間精神の脱自的な志向性にもとづいて本質的に一致するが、その超自然的目的に達するのは、恵みを通しての神からの働きかけによるほかはないのである。このようにして提示された存在論的・神学的・人間論的構想によって、人間を倫理的行為の認識主体および意志主体として理解する視野が開かれ、同時に徳の実現としての倫理的行為を、神の恵みによって成就される人間本性の遂行として位置づけることが可能となる。

次いで『神学大全』第二部の二においてトマスは、人間の自然本性的傾向をその究極目的に照らして詳細に究明することによって、実践のこのような全体的構造を具体的内容に即して展開することに努め、そこから人間の実践の全体像を描こうとしている。トマスはこうした倫理学論考を、第三部で展開することになるキリストによる救いについての議論の前に位置づけているが、そこには、倫理学を人間存在そのものにとって本質的な完成として示そうとする意図が現れている。

本書はトマスの倫理思想を包括的な全体として示しつつその基本的構造を明らかにすると同時に、個別的考察の内容にも立ち入ることを目的としたものであり、そのような意図の下で、本書所収の個々の論考においてトマ

スの倫理思想の諸々の基本的主題が論じられる。まず最初に、人間を倫理的行為の主体と捉える限りでのトマスの人間理解が、神の似姿および人格という概念から解釈され、そうした予備的考察にもとづいて自己認識と自由な自己規定、および人格の全体性と無制約的な尊厳という基本的要素が解明され、そしてそこから、至福論、自由・情動・徳という主題、さらに法論といった個別的考察が展開される（第一論文）。次いで知性論の問題が、倫理的人格の構成にとってもつ意味が論じられる。トマスの知性論は、ラテン・アヴェロエス主義を論駁しつつ、身体と魂との統一的全体である個々の人間を、知性的活動の担い手として際立たせたのである（第二論文）。

トマスのこのような人間理解を背景として、続く諸論文は、『神学大全』第二部の諸々の考察の展開に沿いながらトマスの倫理学の主要な諸論考を取り上げるが、その際には当然トマスの他の著作も視野の内に収められることになる。しかしながらそこでの議論が基本的には『神学大全』第二部を中心として展開されているのは適切なことであろう。なぜなら、この著作においてこそトマスは、創造的な円熟期にあってその包括的思索の頂点に立ち、論じる材料を自在に扱い、一般倫理学と特殊倫理学の両面にわたってそれらの領域全体を体系的に取り扱うことができたからである。

トマスにとって倫理学とは、人間の行為そのものについての理論を意味していた。人間の行為は意味そのものを遂行し、それゆえに目的との関係に依じて構造化されるものであるため、至福という目的こそが、人間の行為の原理であり、同時に倫理学の出発点でもあるということになる（第三論文）。行為は、人間がその目的に関して自由に自己自身を規定する限りで、倫理的性格を有する。そこでトマスは、その精妙な自由論の中で、自由な行為における知性と意志との協働を説明しようとしている（第四論文）。そこでは、目的設定に際しての状況による拘束性と意志の自由の関係という問題が重要な意味をもってくる（第五論文）。しかし人間の自由な決断は、

神の摂理の下で遂行されるため、人間の決断においては第一原因が——諸々の第二原因に対して必然性を課すことなく、それらの自立性を保持したままそれらを動かすという仕方で——現存しているのである（第六論文）。

自由な行為の内的構成、行為と状況との関係、および超越との関係によるその根拠づけなどをめぐるところした問題の複合的な全体は、自由以前で感覚的な諸々の情動と結びつくことによって人間論における位置を確かなものとする。トマスは情動の概念、およびその本質的な相互作用については『神学大全』第一部では論じることがなく、倫理的行為との関係でその問題を初めて扱っている。ここには、倫理性というものを、感覚的存在を含めた人間全体の規定として捉えるトマスの考えが現れているのである（第七論文）。

人間存在の有限性と時間性ゆえに、人間は自らの倫理的使命をただ一回限りの自由な行為において実現するのではなく、不断の努力を通じて自らの行為の習慣、すなわち倫理的習^{ヘビトゥス}態を形成する。この習態によって、人間は自らの個々の行為を、より適切かつ根本的な仕方で、自らの究極目的へと方向づけることができるようになるのである。トマスの倫理思想はこのような徳論をその中心としている限り、その倫理学は、まさに倫理的人格の自己形成の理論であるということになる（第八論文）。人間はその自然本性的次元においては、枢要徳（賢慮・正義・節度・勇氣）の行使によって自らを完成にもたらすものとされるのであり、このようにあらゆる自然本性的な義務を、なんらかの——キリスト教化されたものであるにせよ——古典的人間像へと大胆に還元することによって、倫理的追求に対して、善における全面的な自己完成という理想が示されることになる（第九論文）。しかしながら人間は、神との直接的関係において、つまり対神徳（信仰・希望・愛）において、またとりわけ、聖靈の賜物によって可能になるような、恵みによる神の導きの受容によって初めて、超自然的目的へと到達するのである（第十論文）。

ところで人間の自然のおよび超自然的完成は、それが自由によって実現されるものである限り、目的からの自由な逸脱によって損なわれるという危険を常にともなっている。そこで罪ある行為の本質についての問いは、罪ある行為の種別化に際して、行為者の意図と行為の具体的内実および対象は互いにどのような関係にあるのかという問題に究まることになる（第十一論文）。

トマスの倫理学に固有の特徴は、超自然的で恵みにもとづく次元を含めた倫理的行為のすべての段階において、自立した主体としての人間自身の活動性が自由に展開されているところにある。そこでトマスは、愛の徳カリスによる人間存在の完成をも、相手同士の自立性を強調するアリストテレスの友愛論を通して展開している（第十二論文）。個別的道徳についてのさまざまな主題を探究するのは、トマスの倫理学についての概括的叙述という本書の任を超えることになる。しかしながら、トマスにおける人間の労働の概念といったものを、従来のトマス解釈においてほとんど顧みられることのなかった問題の一例として取り上げるなら、トマスの具体的倫理学が今まで汲み尽くされることのない豊かな富を秘めていることが示唆されることであろう（第十三論文）。

トマスの倫理思想は、人間の尊厳にふさわしい最高の倫理的完成への希求によって駆り立てられたものである。そのためその倫理学は、霊的な教えへと高まり、そこにおいてトマス倫理学の最も内奥にある根本的動機が顕わになることであろう。さらにそこでは感覚的情動から神への超自然的な志向に至るまでの愛が、あらゆる人間的・倫理的行為の核心であるということが示されるのと同様に、人間の実践はそのより高次の段階、最終的には至福における完成において——信仰についての論考で言われているように——「第一の真理」が人間によって受容されるような直視へと向けて自らを超出するのである。そしてここに至って、愛と観想とが互いに共鳴し合うことが霊的生活の理念として求められることになる（第十四論文）。

トマス思想はその内容が実に豊富であるため、トマス倫理学の重要な主題でありながらも本書においては簡単に言及されているだけにとどまった問題も多い。しかしながら、本書が読者にとってトマス自身のテキストに接するための手引きとなり、それによって読者各人の倫理的自己理解に貢献するとともに、倫理的価値の基礎づけと人間の行為の構造をめぐる学問的対話に対していささかなりとも実りをもたらすことができるなら、本書の目的は半ば以上達成されたと言えるであろう。

一九九八年二月二〇日

K・リーゼンフーバー

<i>S. th.</i>	<i>Summa theologiae</i>	『神学大全』
<i>S. c. G.</i>	<i>Summa contra Gentiles</i>	『対異教徒大全』
<i>De Anima</i>	<i>Quaestio disputata de anima</i>	『靈魂論』
<i>De Malo</i>	<i>Quaestiones disputatae de malo</i>	『惡について』
<i>De Pot.</i>	<i>Quaestiones disputatae de potentia</i>	『能力論』
<i>De Unit.</i>	<i>De unitate intellectus</i>	『知性の単一性について』
<i>De Ver.</i>	<i>Quaestiones disputatae de veritate</i>	『真理論』
<i>De Virt.</i>	<i>Quaestio disputata de virtutibus in communi</i>	『徳一般について』
<i>Quodl.</i>	<i>Quaestiones quodlibetales</i>	『任意討論集』
<i>In Ethic.</i>	<i>In decem libros Ethicorum Aristotelis ad Nicomachum expositio</i>	『ニコマコス倫理学註解』
<i>In Pol.</i>	<i>In libros Politicorum Aristotelis expositio</i>	『政治学註解』
<i>In Sent.</i>	<i>Scriptum super Libros Sententiarum</i>	『命題集註解』

目次

序言	K・リーゼンフーバー	i
----	------------	---

トマス・アクィナス著作略号一覧		
-----------------	--	--

一人格の理性的自己形成	K・リーゼンフーバー	三
-------------	------------	---

——トマス・アクィナスの倫理学の存在論的・人間論的構造——

二人間知性に関するトマス説の倫理学的性格	水田 英実	三七
----------------------	-------	----

三 倫理学の基礎としての幸福論	R・L・シロニス	一〇二
-----------------	----------	-----

四 トマスにおける自由について	宮内 久光	一七〇
-----------------	-------	-----

五 「本意論」と「状況理論」のめざすもの	藤本 温	一五五
----------------------	------	-----

——トマス・アクィナスの倫理学より——

六 神の摂理と人間の自由	脇 宏行	一七二
--------------	------	-----

七 トマス・アクィナスの情念論	大谷 啓治	一八九
-----------------	-------	-----

八 トマスにおける人間的なたらきと徳	渡部 菊郎	二〇九
--------------------	-------	-----

九 トマス・アクィナスにおける枢要徳	J・フィルハウス	二二九
--------------------	----------	-----

十 人間の受動的完全性について	加藤 和哉	二六二
-----------------	-------	-----

——トマス・アクィナスの「賜物」(donum)論に関する一考察——

十一	トマス・アクィナスにおける「それ自体として逸脱した行為」	宮川 俊行	三六
十二	トマス・アクィナスのカリタス論 ——友愛としてのカリタス——	桑原 直己	三七
十三	トマス・アクィナスの労働概念について	小関 秀男	三七
十四	愛と観想 ——トマスにおける靈的生活の概念——	稲垣 良典	三九
	文献表		三九
	執筆者紹介		三九
	索引		三八
	『中世研究』総目次		三〇七

トマス・アクィナスの倫理思想

人格の理性的自己形成

——トマス・アクィナスの倫理学の存在論的・人間論的構造——

K・リーゼンフーバー

(村井則夫 訳)

序 問題設定

トマス・アクィナスに先立つ時代、教父と中世の思想においては、アンブロシウス (Ambrosius 三三九頃～九七九年) の『教役者の職務に⁽¹⁾』(De officiis ministrorum) やペトルス・アベラルドゥス (Petrus Abaelardus 一〇七九～一一四二年) の『倫理学、あるいは汝自らを知れ』(Ethica sive Scito te ipsum) のような倫理学についての独立の著作はごくわずかしかな存在しない。『神学大全』第二部はこの二著を凌駕し、哲学・神学的倫理学として後にも先にも類例を見ないものであるが、それはその分量に関してのみならず、主題の広がりや叙述の徹底さに関しても言えることである。この「一つの倫理神学、および倫理神学の最初の学問的体系の……構想」⁽¹⁾は近年のトマス研究においてますます注目を集めているとはいえ、大方の研究はこの全体の中から特定の部分的考察を切り離してそこに関心を集中する傾向にある。ただドイツのトマス研究においては、『神学大全』第二部の基本的意図と全体としての性格、とりわけトマスによって考察された自然法の意味をめぐって立ち上った議論が展開されている。⁽²⁾本稿でも同様にまず『神学大全』第二部においてトマス自身が意図した問題設定を取り上げ、次いでそ

の行論の根底に働いている人格としての人間理解を論じ、こうした議論を元に、倫理学の諸問題におけるトマスの思想の若干の本質的特徴を、とりわけ第二部の個別的論考との関係で取り出すことに努めたい。しかしここでは、トマスの倫理思想をその全体的文脈において捉えたり、トマスの思想的源泉を解明することが試みられるわけではない。そのため特に、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』(Ethica Nicomachea)がトマスの思想にいかなる影響を与えたか、またトマスがどのような点において、アラブ人たちによる註解からは独立して、アリストテレスを解釈し直しているのかといった重要な問題には、ここでは立ち入らないことにする。⁽⁴⁾ 本稿ではトマス自身の倫理学的思考を問題とするが、それはつまり、伝統全体と深く関わりながらも根本的に新しいもの、つまり包括的な哲学的・神学的倫理学を叙述することを目指していたトマス自身の意図に即したものであろう。トマスの伝記作者トッコのグイレルムス(Guilielmus de Tocco 一三三三年以降歿)がトマスの教授活動全体についての新しさを強調していることは、その倫理学に関してもよく当てはまっていると言えるだろう。「彼はその講義において、新たな主題を展開し、問題解決の新たな明確な方法を見出し、その問題解決において新たな証明を挙げた。そのため、彼が新たなものを教えるのを聴き、問題点を新たな証明をもって解決するのを聴いた者は誰一人として、神が彼を新たな光の照明によって照らしているということを疑う者はいなかった」⁽⁵⁾。

一 倫理学の存在論的基礎

(一) 似姿としての人間

トマスは、『神学大全』の第二部、とりわけその前半(第二部の一)においてなされるべきことについて、第